Y. SATO, The Human relationship in the field of the
physical Education. No. 2
—The sociometric studies of the sports club
(Track and Field athletics).—

体育の場における人間関係(その二)

—スポーツ・クラブ(陸上競技クラブ) の社会測定学的研究—

山口県立山口高等学校 佐 藤 裕

(1) 研究の目的

集団の力は消極的には場によつてつくられ、積極的には場を構成しつゝ、集団のまとまりをつくり、全体的な集団行動の効果を決定する。この様な集団力学について、我々は通常ソシオグラムに描かれた選択の頻度と方向によつて力の概略的な傾向をつかんでいる。私はLundbergの示した社会学的指数の中できわめて基本的で妥当性があると思われるものを選び、その指数が実際にどの様な力の性質を示し、どの様な場の構成を示すかを、きわめて小さな集団について精密な観察を行い殊にグループの安定性と崩潰性に重点を置いてその意味を考えて見ようとした。

(2) 研究の期間及び研究の対象

此の調査は1953年4月から1955年10月までの期間山口県立山口高等学校陸上競技部員延人員約50名について継続的に実施した結果である。

(3) 研究の方法

A. 観察記録法 各場面において表現された部員の行動を日記式に詳細にノートに記録する一方、部員には反省日誌を記録させ総合的に考察した。

B. 対話法 練習時、気軽に遊びに来た時或は相談に来た時を利用して極めて自然に話を

進めた後その内容を詳細に記録整理した。

C. 適応反応観察 予想される反応に対して特定の難易環境条件を設定してそれに対する反応を観察した。

D. 社会学的分析法 定期的にクラブ全体のソシオグラムを作製して成員間の全体的な動きを把握し、社会測定学的指数を算出した。実際に利用された主な社会測定学的指数は次に示す二つのものである。

- (1) 相互作用指数 (Choice made index)
- (2) 凝集複合作用指数 (Cohesion index)

(4) 指数の意味

相互作用指数は2人又はそれ以上の人間の可能な全選択数に対する現実になされている選択数の百分率で示される。凝集複合作用指数は一つの選択という規準によつて集団をまとめおく力として向心<→>遠心的傾向の度合を示す。

$$\text{相互作用指数 (C.M.I)} = \frac{\text{現実になされている選択数}}{N^2 - N} \times 100 \quad N = \text{構成員数}$$

$$\text{凝集複合作用指数 (C.O.I)} = \frac{\frac{Ca + Ci}{I}}{\frac{Co}{O}} = \frac{O(Ca + Ci)}{I \cdot Co}$$

I = 内部集団の構成員数。O = 外部集団における内部集団より選択を受けている成員数。

Ci = 入つて来る選択数。Co = 出て行く選択数

ソシオグラムによるスポーツ集団の力学的変化過程

(1853 年～1955 年)

主将 KU マネージャー T

主将 KU マネージャー T

主将 K マネージャー MO

主将 U マネージャー MI

主将 YA マネージャー MI

主将 H マネージャー MI

	1953	1954	1955
I	39, 1.7	33, 0.2	15, 0.7
II	100, 0.5	32, 1.2	0, 0.7
III	83, 2.4	33, 0.8	20, 1.8
IV	11	—	11

	1953	1954	1955
I	Coh > 1	Coh < 1	Coh < 1
II	Coh < 1	Coh > 1	Coh < 1
III	Coh > 1	Coh < 1	Coh > 1

註 ●…リーダー ◎…マネージャー ○…中国大会出場選手 ○…グループメンバー

Ca = 内部集団の成員間の選択数

(5) 研究中に表われたクラブの歴史的背景

- 1953 年 5 月 山口県春季体育大会 3 位
 6 月 高校中国地区大会 敗退
 10 月 山口県秋季体育大会 初優勝
 11 月 高校駅伝山口県予選 7 位
 1954 年 5 月 山口県春季体育大会優勝
 6 月 高校中国地区大会 3 位
 7 月 全国大会初参加 入賞者なし
 8 月 第 9 回国体選手 1 名派遣
 10 月 山口県秋季体育大会 優勝
 11 月 高校駅伝山口県予選 8 位
 1955 年 5 月 山口県春季体育大会 優勝
 6 月 高校中国地区大会 5 位
 8 月 全国大会 初得点 3 点
 東西対抗 1 名派遣
 10 月 第 10 回国体選手 1 名派遣
 山口県秋季体育大会 優勝

以上グループの動きを考察する上に、競技実績は当然基本的な資料と考え、あえて記載した。

(6) 研究の結果と考察

Fig 1 競技実績も余り振るわず、やつとクラブ成員が結合して目標に向って進み始めた時代。① 集団の各成員はスターに結集する傾向がある。(U,K,MO) ② スターは通例技術的優秀者学力的優秀者が選ばれるが特にスポーツ集団においては技術的優秀者を選択する傾向が強く、スターの大部分が県体、中国大余、全国大会の出場選手である。(技術優秀 MI, K, U, K, MO, 技術学力的優秀 U) ③ 成員全体は網型の集団結合を示している。此の型はグループの安定性を保持するに重要な型である。

Fig. 2 初優勝して成員がやつと自己の技術に自信を持ち希望を見出した時代。

① 同一のグループ又は学年に属する二つのスターは潜在的に対立する傾向を持つ (K,MO,) 対立の要因は (a) 上級下級生からの認容度(b)

技術的記録的対立 (c) 外部集団からの認容獲得への葛藤 (d) 学業成績に対する対立感 (e) 自己主張及び失敗に対する非難的態度 (f) 性格的相異などが主なものである。② 分裂したスターは安定した主集団から離脱して、特定の者と単位結合を持つ孤立的存在に変わる傾向がある (MO,IN,) 全体の結合タイプは U を中心に両サイドに開く三角型結合に変つて来ている。三角型結合は比較的不安定な結合である。

Fig. 3 グループ内には多少いざこざが起るが全体的にはまとまりをもつて優位な実績を保っている。① 分裂した二つの核(スター)は他のグループのスターに働きかける (MO→U, K→U) ② 全体のグループと結合度の薄いグループと結合度の薄いグループは分裂の可能性がある。(MO, KN, IN, MR) ③ 個人種目的スポーツ集団では種目別に小サークルを形成する傾向がある。(短距離 K,H,MO,KN,IN ジャンプ U,YA 投てき MI,KC 長距離 NA,MR)

Fig. 4 成員は自己の実力に完全に自信を持つがそれに従って内部構造の新しい変化が起る。① 完全に分裂した核は新しい結合経路を作る。(K,MO-YO-IN-KN) ② 分裂したグループのリーダーは消滅し、新しい集結力を持ったグループで特に上級、下級生との関連性の強いものが選択される (U) ③ 孤立したスターはグループ結合の薄い者を中心として反逆性のグループとして働く (YO-(MO)-IN-KN) ④ 単一結合を持ち競技に真の目的興味を持たない者は分裂する (UT,T)

Fig. 5,6 内部構造の改革が終り、主将の位置の交換が行われ、連続優勝をするに従って学業とスポーツの矛盾について真剣に考え始める。① リーダーを止める大きな原因はスポーツと学業の矛盾である (U→YA→H への変容 U=東大合格 YA=九大入学 H=日大入学) ② グループに余りスターが多い場合は分散的になり易い (同一グループに含まれる U,YA, H) ③ 主将の競技実績が余りない場合には競

技実績を持つグループの力が攻撃的に働く (YA に対する H, KN を中心とする力) (4) スポーツ集団の主義は三つに分類される (a) 徹底的に競技中心主義の集団 (H, KN, F, YO, MR) (b) 運動学業両立主義集団 (U, YA, MZ, KC, N A) (c) 徹底的に受験中心主義である。(a) 型は比較的リーダーに選ばれる率は多いが、しばしばグループをまとめる点には欠ける所がある。(b) 型はリーダーに選ばれる率が最も大きく、グループは非常によくまとまる。(c) 型はグループからの反対が多くまとまりがない。以上の経過 (Sociogram 1~6) を社会測定学的指数で総括的に調べて見ると (Fig. 7) の様になる。これを不等記号で示すと (Fig. 8) の様になる。(C.M.I.) Choice made index は 10) の時グループ内の成員相互作用は完全に行われている事になる。しかし結果によれば必ずしも 100 % の場合にのみ安定性があるとは限らない。例えば 50 % 以下の場合においても充分安定度が高い場合がある。それは複合グループの上下関係 (各学年単位のグループの安定度) が如何に展開されるかに依存するためである。(C.O.I.) Cohesion index の持つ意味は先に (C.M.I.) Choice made index がグループ内の密度を示したのに対して、Cohesion index は遠心 $\longleftrightarrow$ 向心的な力関係を示す。此の指数は三つの特性がある。即ち 1) Cohesion index < 1 の場合は外部へ働きかける力が大きい事を示す 2) Cohesion index = 1 の場合内部のまとまりが大きい事を示す 3) Cohesion index > 1 の場合は外部より受ける力が大きい事を示す。従つてグループが安定性を示すのは Choice made index が 100 % の近似値をとり且つ Cohesion index ≥ 1 の場合であると言える。図表によると 1953 年では主将は 3 年生にあり 1, 2 年生の力が一方向に集中され安定しているが 1954 年では主将は安定性の強い 2 年生に集中されている。若し此の場合 3 年生を主将に機械的に選ぶとすれば、

グループの内部構造は直ちに安定性を失つて来るのである。此の年は分裂傾向を持った年で 3 年から 2 年生への主将が改選された時代である。

結 論

以上 Sociogram を中心に考察した社会測定学的指数による調査結果は C.M.I. と C.O.I. の二つの指数を使用すれば概略的なグループの安定性と崩壊性の傾向をつかむ事が出来る事を証明した。即 (A) グループのリーダーは必ず向心的傾向 (C.O.I. > 1) の集団になければならない。(B) 向心的傾向を持つ集団は互いに反撥する傾向を持つ。(C) 各集団は C.O.I. ≥ 1 の傾向を持つ集団に凝集して安定しようとする傾向がある。(D) 高学年の集団が遠心的傾向 (C.O.I. < 1) を持つ時は安定性が失われる。(E) 遠心性 (C.O.I. < 1) のグループであつて、しかもその中に二つのスターが生じた場合この二者の分裂は完全に破壊的な力となると云う事である。

(チーム) 集団分裂の防止と対策。一般に集団から孤立したグループが発生した場合には分裂の傾向があると見なければならぬ。特に指導の中心は分裂グループに置き、開放的な話合いの機会を持ち問題の内容を分析する必要がある。

こうした集団は破壊的な力として働き、他の者を引入れて新しい勢力を得ようと努めるので他の主体的グループをまとめる様に注意する必要がある。競技実績が同等の力を有している二人が同一集団に属し他の者からの認容度が高く、二大勢力を創造している場合は分裂の可能性のあるものと認めて指導しなければならない。リーダーはその人物が例え人間的条件をそなえて居ても、余り競技実績のない時は他の強力な選手集団に押されて逃避的な行動を取る結果になるので或程度実績、忍耐力の強い者をリーダーに選ばなければな

らない。又個人的には選手が強くなると次の行動を示しはじめるのでこうした態度の矯正指導がグループをまとめる大きな力になると思われる。

(1) 尊敬の念の欠如指導者、友人の忠告に対して反抗的。(2) 自我中心的一人と一緒に行動せず。自分勝手な行動をする。(3) 軽蔑の念の増大—自分より技術的劣等者を軽視する。

(4) 寛容態度の欠如—みだりに人を自己の比較の対象として非難する。(5) 練習量の減少—欠席が多く自己満足的で練習に熱中しない(6) 責任感の欠如—自分の技術的失敗に何かと理由をつけてその場のがれをする(7) 協調性及

び娯楽の悪化。

引 用 文 献

- 1) Carl C. Taylor and B.F. Brown, Human relation, Harper & Brother Printed in the U.S.A. 1926.
- 2) George A. Lundberg, Social Research: A study in method of Gathering Data., 2nd ed. Longmans, Green & Co., 1942 (東大出版部訳)
- 3) Sideny L. Pressey and Francis P. Robinson, Psychology and the New Education, Harper E Brothers 1944.
- 4) 日本グループダイナミックス学会編 グループダイナミックスの研究
第1集 第2集 第3集 理想社
- 5) 今西錦司編 高崎山のサル 1954 光文社